



# 筑紫女学園大学リポジット

A diary written by A. Stein during his stay in Japan concerning Silk Road study, Pt. 1 : about Bodleian Library (Oxford) collection Mss. Stein 250

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/237">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/237</a>

# スタイン滞日日記資料にみるシルクロード研究 (I)

Bodleian Library (Oxford) 所蔵資料 Mss. Stein 250より

大 津 忠 彦

A diary written by A. Stein during his stay in Japan concerning Silk Road study, Pt. 1  
—about Bodleian Library (Oxford) collection Mss. Stein 250—

Tadahiko OHTSU

## I. はじめに

中国甘肅省敦煌における多数の仏画仏典、古文書等の発見（1907年）を含む数次にわたる中央アジア探検や、晩年のイラン、メソポタミア踏査に数多くの成果を積み、東西交渉史研究にとって不朽の糧、指南書たる業績を遺すスタイン (Stein, Mark Aurel, 1862~1943年)。そのつとに名声を博した金字塔、あるいは人となりについて折々に語られ続けてすでに久しい。スタインの3次にわたる中央アジア探検（1900~01年, 1906~08年, 1913~16年）は、おもにホータンからいわゆるシルクロード「西域南道」を經由し、東は敦煌、カラ・ホト、西はカシュガール、サマルカンド、ブハラに至る広範な沙漠域であった。各次調査の成果はそれぞれ『Ancient Khotan』(1907年), 『Serindia』(1921年), 『Innermost Asia』(1928年)と題する大著に詳述され、採集品の大部分はインド国立博物館、大英博物館の所蔵するところとなった。

顧みればスタインの活躍期は、ちょうど日本において今日に連なる様々な近代的歴史学が醸成しつつあったころにあたり、したがってたとえば「敦煌学派」の輩出も、スタインらによる調査研究成果の受容が可能であった当時の我が国学界土壌から芽吹いた標徴的動向のひとつであったと考えられる。

筆者は日本における西アジア考古学研究あるいはそれに連なる学問の系譜を調べ、先学俊秀らの行状をたどる過程で、Bodleian Library (Oxford) 所蔵資料中に、スタインと我が国との確実な接点を垣間見る事のできる「スタイン滞日日記」とでも称すべき資料を見出すことができた。それは、スタイン自身にとってのフィールド・ノートであるとともに、当時の我が国斯学界を活写する史料内容を併せ持つ。今回は、この日記のうちから、スタインが滞日期间中に相まみえた人物を中心に資料検討を行ってみたい。

## II. スタインの日本訪問時期

筆者が「スタイン滞日日記」と称する資料は Bodleian Library において「Mss. Stein 250」と登録された、縦12.7cm、横8.4cm、厚さ1.7cmの、掌に納まる大きさほどのスタイン自筆日記帳（1930年）である。その表紙はくすんだ臙脂色の布目紙装丁で、頁を捲ると、日本訪問に関連しては、月別予定一覧のうち4月の頁欄に、4月10日（木）「横浜着」より同月21日（月）「長崎発」までの12日間の欄毎に、主たる訪問滞在先名を記す前半部と、各日付の日記頁からなる。後者は日本滞在記本編とでもいうべき部分であって、細かな、しかし力のこもった個性的文字でびっしりと綴られている（図1, 2, 3）。

日本訪問を果たす1930年（昭和5年）はスタインにとって、みずからの人生を賭したともいえようその探検調査活動の一大転機であった。すなわち1900年以来举行された「中央アジア探検」は、この年開始の第4次中央アジア探検が事実上失敗裡に終息せざるを得ず、爾来、スタインは1932年の第1次イラン踏査以降フィールド活動の対象地を西アジアへと移したのである。ここにその記録を追うスタインの日本への立ち寄りとは、彼の中央アジア探検に資金援助をせんとするアメリカとの交渉目的で渡米した後、ヴァンクーヴァーからいよいよ航路中国（中華民国）へと向かう途中であった。「スタイン滞日日記」の月別予定一覧3月29日（土）の欄「start from Vancouver」、ならびに4月10～21日の行状は、スタインの年譜に照合すると、まさに転機直前にあたるのである。

## III. 日本への憧憬 — かねてよりの想い —

スタインにとって、日本はいつの日か訪れるべき憧憬の地であった。畏友のひとりセイイス（Sayce, Archibald Henry, 英, 1845～1933年）は、はやく1912, 17両年に日本訪問を果たし、東西交渉史を物語る遺産に親しむとともに、日本各所で「シュメール」、「バビロン」を講じた。このセイイスに宛てた1918年11月20日付書簡中に、自分もいつの日かきっと「日本」、「正倉院」を訪れたい想いを、スタインはセイイス本人に対する羨望とともにあつく綴っている。:

（前略） You deserve, indeed, to be envied for the great and well-merited privilege you enjoyed at the Shoso-in\*<sub>1</sub>. I can imagine what a joy it must have been for you to make those grand discoveries you refer to. How I wish I could have been with you as a humble acolyte or at least have a chance of looking at those treasures behind their glass cases! For nearly a year I have been trying to secure from Japan a copy of the Shoso-in Catalogue, a publication which was of great help to my assistants at the Brit. Mus\*<sub>2</sub> when cataloguing our figured silks, etc., from the 'Thousands Buddhas\*<sub>3</sub>'. （中略） Helped by this new light it was a specially interesting task for me to write for Serindia the chapter dealing with the decorated textiles from the Thousand Buddhas. （中略） Of course, I am longing to see Japan & its wonderful treasures with my own eyes. But I wonder when I may find the time for a visit to the Far East. （後略）

(Bodleian Library 蔵, Correspondence of A. H. SAYCE, VII, MS. Eng. letters, d. 68, 199 201葉より)

[下線部注 \*1 Shoso in : 東大寺正倉院 / \*2 Brit. Mus = British Museum : 大英博物館 / \*3 Thousands Buddhas : 千仏洞 (敦煌莫高窟)]

これは、第2次中央アジア探検の学術報告書『Serindia』完遂直前のスタインが、「正倉院」に代表される在日本の東西交渉史関連資料をなんとか実見参照したいものと、その必要を痛感する心情を吐露した書簡部分とみなすことができよう。

#### IV. スタインの日本到着

1930年4月10日、かねて憧れの日本にスタインはその第一歩をしるした。翌日付の新聞は、横浜港に到着のスタインについて「四十八年間インド政府の考古學研究の囑託を續けたオーレル・シタイン卿」(『東京日日新聞』)、「インドおよびアフガン、チベット、ペルシヤ、中央アジア高原地帯を英國政府の命により四十二年間に六回の大探検隊を組織し古代人物文化についての種々なる貴重な発見をして佛教その他に関する約十五種三十余冊の著書ありこの方面の權威である」(『東京朝日新聞』)などと紹介する記事を掲載した。以下は日本着当日のスタイン日記である(日記引用部分中の\*\*\*は判読不能箇所を表わす。以下同様)：

##### 1930 THURSDAY APRIL 10

Woke up by 4 P.M. & was ready for medical inspn (quarantine) by 6 A.M. Long wait for police inspn interested official in visit to Nara. Letter from Whyte reached me by 7 AM & gave encouraging\*\*\*. My 'stopover'\*\*\*. So by 8 AM reached New Grand Hotel facing park &\*\*\*At 9 started in motor bus for Kamakura Once\*\*\*from Yokohama suburbs along bluff delightful succession of greens & wooded hills. Hotel night porter on his way home explains groups of holiday makers, arrived near Kamakura Stn & walked up avenue leading under Torii to Hachiman Shrine \*1 Any stream of pilgrims ripples along broad road lined by cherry trees still in bloom Left modern shrine\*\*\*by fine trees & walked up steep road to Kokenji temple. Noble gateway in Chinese style & high roofed shrine. All\*\*\*China\*\*\*European resort. Up\*\*\* \*\*\*in picturesque\*\*\*with\*\*\*\*\*of Japan landscape gardening. Thirty of tipsy\*\*\*with yellow scarves settlers down at t\*ble Return along same road missed Eunoji temple. Secured Ri\* show with old\*\*\*of humour & passing along croud shop, lined roads, asphalted, Visited Daibutsu \*2. Fine bronze image\*\*\*enclosed in temple, \*\*\*in expression as one\*\*\* \*\*\*\*\*. \*\*\*of\*\*\* \*\*\*eyes\*\*\*when photoed from distance. B\*\*\*built on 4 image. On to Kwannon Shrine on picturesque hillside. F\*\*\*& only begger\*\*\*\*. Wooden statue in dark interior, sightseeing f\*\*\*& cards. On\*\*\* \*\*\*street, soldiers, to Kaihin Hotel, Comfortable

modern hostelry. \*\*\*attendants. By 2・30 in crowded tram to Katase\*<sub>3</sub> along sea shore. Continuous row of shops to Enoshima Island\*<sub>4</sub>, another\*\*\*. By steep stairs to hilltop. Dancers on platform. As\*\*\* \*\*\*

早朝の遅々とした入国手続きを終えてホテルに入るや、10余日の船旅の疲れも見せない様子で、9時には行動開始。桜見物で賑わう鎌倉にさっそく古刹、八幡宮（\*1）、大仏（\*2）から片瀬（\*3）、江ノ島（\*4）方面を探訪している。大仏像にはとりわけ興味を覚えたようで、日記には写真撮影したことをわざわざ記している。

そして滞日二日目以降、スタインは研究者たちと面会することとなる。どこを訪れ、そしてだれと会見したか、この滞在旅程内容にこそ、スタインの研究自体および当時の日本における斯界状況を窺わせるものがあると考えられる。本論では「スタイン滞日日記」中より、関連人物名の比較的頻出する4月11、12、16日付の日記内容より、これまで読み解き得たうちの幾人かについてその関わるところをここに集成しておきたい。ただし、判読、解釈に窮する不得要領箇所が資料中なお多く残存し、不十分ながらもあえて現段階までをここに記し、ために、今後に資する助言、修・補正あるいはご教示頂ければ幸いである。

## V. 資料1：1930年4月11日（金曜日）付日記（図1）

1930 Friday APRIL 11

Up by 6 A.M. Letters to Whyte & Jachs. Left New Grand Hotel by 9・30 A.M. for Saguri cho stn. Drive to Maison Franco・Japonaise\*<sub>1</sub> Instead of Maspero\*<sub>2</sub> received by Demiéville\*<sub>3</sub> who has

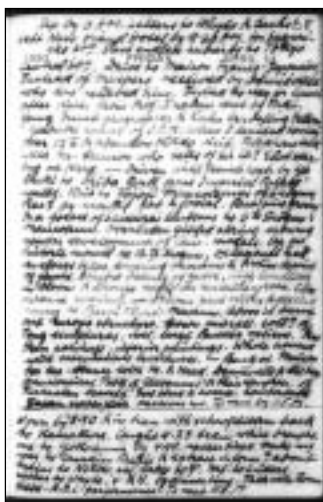


図1 1930年4月11日（金曜日）付日記

relieved him. Invited to stay for lunch after visits from Prof. Ino Dan\*<sub>4</sub> by Taki\*<sub>5</sub>. Young French geographer & Kahn travelling Fellow Yabuki\*<sub>6</sub> comes by 3 P.M. when I decided to stay over 12th & abandon Nikko visit. Telephone talk with Mr. Samson who tells of Sir Chs Eliot\*<sub>7</sub> staying at Nara Driven with French hosts by Yabuki to Shiba Park past Imperial Palace Walls. Visit to Zojoji mauseleums of Shogun Past by mon\*\*\* \*\*\* &\*\*\*. Past fine gr\*\*\*& a forest of Samurai lanterns to 6th Shogun's mausoleum. Over\*\*\*gilded shrine showing\*\*\*sh development of Chinese models. Up prehistoric mound to 12th Shogun, octagonal hall encloses stupa covering remains &\*\*\* deposit of jewels. Sombre beauty of grove, with camellias in bloom & bronze roofs in metallic green. \*\*\*warm evening. Driven past villas & old time

houses to Baron Okura's Museum \* 8. Above it burnt rest\*\*\*Europe structure. Shown miscell. colln of Tang sculptures, incl. large Buddha reliefs. Fw Han carvings, inferior paintings. Whole housed with\*\*\* \*\*\*. \*\*\*Back to Maison for tea. Dinner with M. & Mad. Demiéville & the two pensionaires. Talk of Chav\*\*\*& their daughter, of Turkestan travels, Feel tired &\*\*\*, Comfortable Japan, upper floor receives me. To rest by 11 P.M. (以下は4月10日分のつづき, 筆者注) down by 3・40 & in tram with school children back to Kamakura. Caught 4・23 train which brought me to Yokohama by 4・49, rather tired. Make my way to Canadian Pacific & extract informn about trains to Nikko, etc. Cable to T. Ms. to Luders. Letter to Whyte, T&H. by dinner time, Talk with Rosen Field. A.D.C\*\*\*. To rest 11 P.M.

#### 4月11日付日記(資料1) 注解

- \* 1 Maison Franco・Japonaise : 日仏会館
- \* 2 Maspero : Henri Maspero (1883~1945年)
- \* 3 Demiéville : Paul Demiéville (1894~1979年)
- \* 4 Ino Dan : 團伊能 (1893~1973年)
- \* 5 Taki : 瀧精一 (1873~1945年)
- \* 6 Yabuki : 矢吹慶輝 (1879~1939年)
- \* 7 Sir Chs Eliot : Charles Eliot (1870~1941年)。東洋学者で外交官。1920年より1926年まで、駐日英国大使。
- \* 8 Baron Okura's Museum : 大倉集古館

#### Maison Franco・Japonaise に関連して :

4月11日の行動は、日仏会館に「Demiéville」を訪ねることからはじまっている。この Paul Demiéville は「フランス極東学院 (Ecole française d'Extrême Orient) の研究員をした後、当時は履門大学教授であった。また、中国学者で仏教学を専攻した。会館には1926年7月到着、1930年6月まで滞在し(フランク, 弥永1974; Frank, Iyanaga 1974)」、当時 Maspero の後継として「佛蘭西學長代理(『日佛会館第七回報告』(自昭和五年四月一日 至昭和六年三月卅一日), 9頁)」の立場にあり、「佛国派遣学者ニシテ佛教辞典「法寶義林」編纂主任(同前)」であった。彼の名前は4月11日付日記ばかりでなく4月12, 13, 15日の各日付日記にもそれぞれ認められ、Charles Eliot と共にスタイン滞日日記中に多出する人物のひとりであり、要所でスタインを遇している。

日仏会館はスタイン来館を「佛国政府派遣ノ碩学, 青年学者及其他来館ノ学者」(前記『日佛会館第七回報告』8頁) 事項欄に記録として留めている。すなわち、前記報告には「当会館八本年度中左記人士ノ来訪ヲ受ケタリ」として「昭和五年四月十一日 英国著名ノ東洋学者 サー・アウレル・ステイン」(同前12頁) “le 11 avril 1930 Sir Aurel Stein, Orientaliste” (同前仏語欄8頁) とある。

### 瀧精一に関連して：

美術雑誌『国華』の主宰者として知られる瀧はスタイン来日当時、東京帝国大学文学部教授であった(1913~34年)。スタインとの関連については、その専攻である美術史において明確な接点を有する。すなわち瀧には「大正二年(=1913年、筆者注) 歐洲を漫遊せる際英京博物館に於て親しく之を閲覽し、其時より既に其繪畫を木版となして印行するを欲したりしも、スタイン氏の詳細なる報告出版せらるゝ迄は日本に於て之を印行することは見合はずべき約束なりき(瀧1922年)」という経緯があった。このことは、スタインの4月12日付日記頁の記載5行目「Taki & Kano who in 1912 had visit B. M. collection」と内容的に符合する。なお、4月12日付日記6~11行目は楽浪古墓出土品に関することであるが、末尾の「(see kokka)」は『国華』を指すであろう。

### 矢吹慶輝に関連して：

公刊された年譜の記すところによれば、東京帝国大学文化大学講師ならびに社会事業職員養成所講師(内務省)を当時委嘱されていた矢吹慶輝は、1919年「7月以降、財団法人啓明会の補助により、英国博物館所蔵スタイン蒐集中国古写本の研究並びに写真撮影の事業に従事し、大正一四年三月までにロートグラフ白写真六千葉七百点を本邦に将来し、その事業を完成す。(矢吹1985)」とある(芹川1998年)。この顛末については、矢吹1985年著書328頁の解説1「日本宗教学の道を示す」の記載にいま少し詳しい：「十九世紀以降の世界考古学史上、最大の出来事とされたのが燉煌の発掘であった。そこで獲られた資料は、スタインやペリオによって英仏の博物館にもたらされていた。たまたまアメリカ留学の帰途にあった先生(=矢吹慶輝、筆者注)は、ロンドンにある大英博物館を訪れて、その資料を実験する機会をもたれた。そして、そのなかから、中国仏教史上暗闇といわれていた三階教に関する多くの資料を発見されたのであった。これが第一回外遊のおりのことである。それらの資料を複写蒐集すべく、啓明会の補助を得て直接にロンドンに赴かれたのが二回目の外遊である。しかるに、大英博物館においては、思いがけずも資料の使用を拒絶された。しかし、それに屈する矢吹先生ではなかった。一策を案じて博物館側の仕事を献身的に手伝うことひと月余り、その学識と誠意とはジャイルスはじめ関係者一同をして驚嘆感激せしめずにおかなかった。そして、ついには、先方より進んで資料の使用複写の自由を申し出ることとなり、りっぱに目的を果たして帰朝されたのであった。(矢吹1985)」。引用文中の「アメリカ留学」とは、1913年8月渡米を指し、ハーバード大学にあって姉崎正治の助手であった(芹川1998年)。ちなみに、4月12日付スタイン日記中に「姉崎」の名が登場する。

## VI. 資料2：1930年4月12日(土曜日)付日記(図2)

1930 SATURDAY APRIL 12

Up by 6:30 after fair rest. Wrote up diary & by 8:30 joined by Demiéville from his Japan-house. Show I.A.\*\*\*, etc. By 9:30 Ino Dan came to take us to University. Received by Taki & Kano\*1



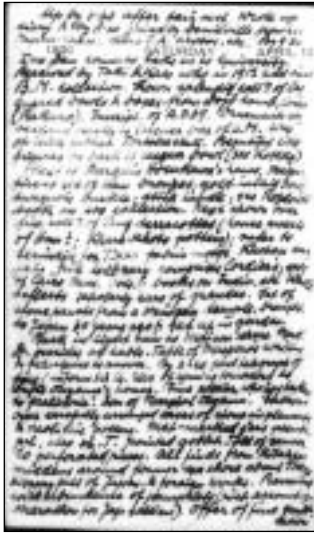


図2 1930年4月12日(土曜日)付日記

who in 1912 had visit B.M. collection. Shown splended colln of lacquered bowls & boxes from Dojo tomb, Corea (Rakuro). \*\*\*of A.D.69, Ornaments correspond exactly to lacquer box of L.M. Little of silk fabrics. Torkoise shell. Beatiful little figured on back of lacquer bowl (see Kokka) Next to Marquis Hosokawa's house \*2, magnificent set of Han bronzes, gold inlaid bowl. \*\*\*backle, stick handle : tea Rozdo\*\*\*book on\*\*\*collection. Next shown over fine colln of Tang terracottas (house models of Han?. Khras Khoto pottery). refer to Serindia for T.XXII fabric motifs. Khotan carpet. Five\*\*\*comprises Cordier's sets of Cairo Mus. vols. 1. books on India, etc. Whole reflects\*\*\*care of grandee. Set of stone panels from a Hringan Temple, brought to Japan 30 years ago & set up in garden. Back in light rain to Maison where Mad. D. presides at table. Talk of Maspero's writing

&\*\*\*house to\*\*\*. By 2・40 past telegraph of fice (in\*\*\*Sir Ch. Eliot of coming\*\*\*) to Duke Ohyama's house \*3. Fine soldier, who has taken to 'prehistoire': Son of Marshal Ohyama. Shown over carefully arranged cases of stone implements & neolithic pottery. Mat marked jars plentiful, also\*\*\*. T. painted goblets. Told of sauses, no perforated pieces. All finds from kitchen middens around former sea shore about Tokyo Library full of Japan & foreign works. Presented with abundance of pamphlets(with account of Marathon for Jap soldier). Offer of fine gruth\*\*\*sion on pottery all 9 for Arch. Survey Library. German dedicasion\*\*\* Ruice's miltry training. \*\*\* \*\*\*from soldiers\*\*\*. Visit to Mad. Demiéville pretty Jap. house. Then to Imp. Academy \*4 by 6・30 P.M. Dinner after general meeting. Meet Anesaki \*5, Taki, Kato & Shiratori \*6. By side of President Ino Sayukai welcomed by him. Reply about Jap. historical sause. Return by 8・30 Visit of Path\*\*ri K.K.Satramoe barmae

#### 4月12日付日記(資料2)注解

- \* 1 Kano : 狩野直喜 (1868 ~ 1947年)
- \* 2 Marquis Hosokawa's house : 細川護立 (1883 ~ 1970年) 邸。細川本家第16代当主。
- \* 3 Duke Ohyama's house : 大山柏 (1889 ~ 1969年) 邸
- \* 4 Imp. Academy : 帝国学士院
- \* 5 Anesaki : 姉崎正治 (1873 ~ 1949年)
- \* 6 Shiratori : 白鳥庫吉 (1865 ~ 1942年)



### 狩野直喜に関連して：

「Taki」と併記の「Kano」は「敦煌文書を最初にフランスやロンドンで調査した日本人（宇野他1971年）」といわれる狩野直喜であろう。年譜によれば狩野は1912年9月より翌年10月帰朝まで欧州留学（同前）。この期間中、狩野直喜とスタインとの直接の関連については、1913年1月22日付の狩野書簡（桑原隲蔵，内藤湖南宛）に言及がみられる。ここでは、『藝文』第4年第4号（1913年4月）所収を援用したところに依る（神田1970年）：

「當地にてシャバンヌ及びペリオ氏の話によれば、Stein氏の発見物は分量に於て猶これよりも多く、其内には貴重なものも少なからず、繪畫も澤山有之候由、漢字のものはなきなどと、話有之候へども、これは訛傳に有之候。然るに之が又困難にて、Stein氏は目下印度にあり、而して其古書はブリチシュ・ミュージアムの地下に貯蔵し、目録さへも無之見ること出来まいとの事を聞き候間、先づシャバンヌ氏に依頼し、同氏より印度へ書面を出し候處、Stein氏の返信あり、かくゞせよと懇切に申候。Stein氏は小生が覽る事を喜び候様子なれども、圖書館などいふものは支那でも西洋でも同じことに有之、面倒な事を嫌ふものに候間、果して成功致し候哉、疑問に候へども、Stein氏先容あり、又セイス氏の紹介状も有之、ムゲにハネ付られぬ事と存候。若し見ることが出来れば、倫敦も二三月は懸ることゞ存候。瀧氏も昨年末より當地へ來り、目下同宿、大に心強く有之候。（後略）」。

ちなみに、引用書簡文中の「セイス」は、先掲のスタイン1918年11月20日付書簡の受信者 Archibald Henry Sayce である。

### 大山柏に関連して：

陸軍大将・元帥，陸相・参謀総長を歴任し、のち元老，内大臣を勤めた大山巖（1842～1916年）の次男で、戦前において稀代の考古学者であった大山柏。彼は当時東京青山隠田にあったその私邸内に、「大山史前学研究所」を構え、のちに日本考古学史にその名を留める当時新進の研究者らと共に、とりわけ関東地域における縄文時代遺跡調査に幾多の業績をあげていた。考古学に関わるその生涯については、近年再吟味、公刊された研究成果に拠ることができる（阿部2004年）。

スタインとはその研究分野においておよそ共通点を見出し難い大山柏ながら、スタイン日記中の記載は比較的細に至ったところがある。いかなる経緯で、スタインが大山を訪問したかについては不詳ながら、幸い大山が遺す記録のうちに当時のスタインの姿勢を窺わせるところがある：「また、彼（＝スタイン，筆者注）は独り地形，地質学に長ずるのみでなく，考古学もマンザラ素人ではない。今年代を覚えていないが，日本にも來，私の家にたずねてきた。何んの予告もなく突然我が家にきたのだから，私はビックリ仰天した。初対面であり誰の紹介もない。私は合点がゆかないので，貴君は探険家のスタインかと直言したら，然り然りで，本物のスタインと解った。彼の目的とするところは日本の石器時代と大陸との關係にあり，何處で覚えたのか縄紋式や弥生式等に就ても，一通り心得ておるばかりでなく，我が国石器時代祖原に就ても鋭い質問を行い，且つ中垂，南露等て有名な彩色土器に就て，我が国との相關問題等，全く専門的な質問には吾れわれを驚かした程だった（後略）（大山1989年）」。

日本考古学についてのスタインの関心と知識は、あるいはセイスを介して在日英国人考古学者マンロー (Munro, Neil Gordon, 1863~1942年) からではないかと推察される。マンローは1892年来日。爾来その生涯を北海道で終えるまで、日本を考古学研究のフィールドとし、その成果を『Pre-historic Japan』(1908年) に上梓したほどである。セイスはその初来日 (1912年2月) 以前よりすでにマンローとは知己の仲であり、第一回来日の折には、しばしばマンローを横浜を訪ねている (Sayce 1923, 377頁)。

#### 帝国学士院に関連して：

日本学士院の前身「帝国学士院」をスタインが訪れたことについては、同院欧文紀要『Proceedings of the Imperial Academy』(第6巻第4号, 1930年) 所収の「General Meeting, April 12, 1930」に次のように記録が残る：「Sir Marcus Aurel Stein, the eminent British archaeologist, who was on a short visit to Tokyo, was invited to dinner. At the table the President spoke in high admiration of Sir Aurel's scientific achievements, (後略)」。また、『総会議事録』所収「第二百三十四回総会」の記事として、「昭和五年四月十二日午後三時会議ヲ開ク (中略) 又今回来朝セシ英国ノ考古学者サー・マーカス・オレル・スタイン博士ヲ本日ノ晚餐ニ招待シ歓迎ノ意ヲ表スルコトニ致シタル旨ヲ報告シテ承認ヲ求ム (後略)」とあり、スタインが同院で会ったと記録する「Anesaki」, 「Shiratori」はこの議事録に記された出席者名中に「姉崎正治」, 「白鳥庫吉」として確認することができる。当日総会の出席者53名中には上記他、「スタイン滞日日記」に関わる人物として「狩野直喜」, 「瀧精一」の両名、また、佐々木忠次郎 (モースの助手として大森貝塚発掘調査に従事, 1857~1938年), 小川琢治 (京都帝国大学における考古学教室創設に尽力。同教室初代教授濱田耕作とは姻戚関係。1870~1941年) の名前があることは注視される。

### VII. 資料3：1930年4月16日 (水曜日) 付日記 (図3)

1930 WEDNESDAY APRIL 16

Morning misty but clearing during journey to Kyoto, reached at 10・3 AM. Viewed wooded hill Momoyama where Emperor Meiji buried (\*\*visits to the mound by Ministers & Ambassadors) & t're careful tea plants of Uji. Along wide clean roads to Miyako Hotel at N.E. corner, under pretty hill. Awaited by Prof. Haneda<sup>\*1</sup>, S. Umehara<sup>\*2</sup>. Talk of Serindia & Uigh\*\*studies in room on 6th floor. Then joined by Marquess Hosokawa<sup>\*3</sup>, Prest of Archeological Assosn, Fine aristocratic face of true Japan. style. Taken to lunch by him with H. & Ume. A happy party Hosok. knows England & may visit India. Ask him to come to my camp. By 1・30 P.M. with Um' to Chion in. Hearty reception by abbot, dignitary of Jodo Su, Dr. A.Wakai pupil of Leumam, joined. Presents of rosary, handle & books. Next part Hs wangji temple(late abbot Court Oh\*\*\*,\*\*\*Mukden) to Koryuji temple in N.W. suburb founded under Shotoku. Newly built treasure with door in bronze(Italian style!)

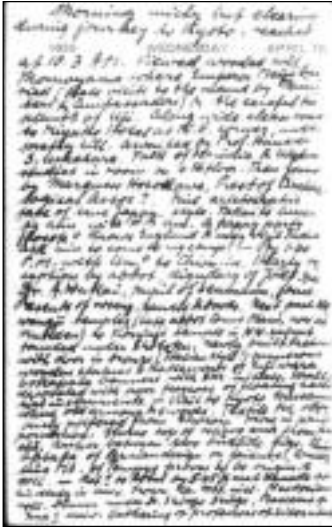


図3 1930年4月16日(水曜日)付日記

\*\*\*wooden statues & Kakemono of Fujiwara. Lokapala b\*\*\*with  
 Skr\*\*\* \*\*\*. Walls decorated with poor frescoes of \*\*\*s sial in-  
 struments. Visit to Kyoto Museum where old armour & swords,  
 Textile fr\*s. obviously pi\*\*\*ed from Shosoin More in pri\*\*pos-  
 session. \*\*\*top of reli\*\*\*arch\*\*from Kusha. Ars\*\*\*between\*\*\*  
 birdlike figs. \*\*\*Aptaba of Persian design in faience. \*\*\* \*\*MS.  
 of Teupys proves to be origin. A \*\*\* Retn to Hotel by 5・45 &  
 met Haneda at his study in Univ, Shown Ch. MSS. with  
 Nestorian roll. Dinner under Dr. Shinzo\*\*\*, President of Imp'  
 Univ \*4. Gathering of professors of Literaturs (以下 次頁の4月  
 17日日記下部に続く, 筆者注) History, etc, Met Kano, Naito \*5  
 (a fine old Chios\*\*\*\*\*) Dr. Sakaki (Skr), Hamada \*6 (Arch.),  
Ogawa \*7 (Geogr.) Dinner with speech read by Prest, which I re-  
 plied to compared wonder of present transformation with\*\*\*of

6th cent\*. After tea & la Chin. left by 9 P.M. Met Sir Char. Eliot in his room (642) next to mine  
 At 12 noon Dr.Timony's Semadan greeted me at Hotel.

#### 4月16日付日記(資料3)注解

- \* 1 Prof. Haneda : 羽田享 (1882 ~ 1955年)。京大教授。実証的西域研究の先駆者。1953年文化勲章受賞。
- \* 2 S. Umehara : 梅原末治 (1893 ~ 1990年)。京大教授。
- \* 3 Marquess Hosokawa : 前出 (資料2 注\*2)
- \* 4 Dr. Shinzo \*\*\*, President of Imp' Univ : 新城新蔵 (1873 ~ 1938年)。天文学者。中国天文学史研究の先駆者。1929年京大総長となる。
- \* 5 Naito : 内藤湖南 (虎次郎, 1866 ~ 1934年)。東洋史学者。京大教授。とくに中国史研究で功績顕著。
- \* 6 Hamada : 濱田耕作 (1881 ~ 1938年)。考古学者。京都帝国大学考古学教室初代教授。
- \* 7 Ogawa : 小川琢治 (1870 ~ 1941年)。地質学, 地理学者。京大教授。とくに中国の地理学, 天文学で功績顕著。

4月16日は京都を訪れ, 羽田, 梅原両教授に迎えられ細川氏に再会。知恩院, 広隆寺, 京都帝室博物館を訪れた。この日京都帝国大学で催された歓迎晩餐会席上, スタインは多くの「敦煌学者」他関係者にまみえた。

### 梅原末治に関連して：

梅原とスタインとの具体的係わりは、1925年に始まるとみられる。この年の末、梅原は欧州に遊学。みずからの記すところによれば、「内藤先生と狩野先生とからいたゞいた紹介状は、たゞにペリオ教授に親炙し得たのみならず、更に多くの同じ道の學者達にも近づく幸いを持ち得ることに大きに役立つたのであった（中略）一九二六年の一月末に巴里に着いて早速ペリオ教授にお目にかゝり得る仕合わせを持つた私は（中略）三月末ロンドンに移るに當つてまたスタイン卿に親しく接し得ることを心私かに期したのであつた。所が當時大英博物館でその第三回西域探検の將來品が整理された上特別展観が行はれてみて見學出來大いに興味を覺えたことながら、將來者たる同氏は更に新たな調査の為に印度に出掛けられて不在であつたのであり、爾後も歸英がなかつた模様で、引いて割合に長い滞歐の期間を通じて遂に面晤の機會を得ないで終わつた。尤も右の展観品中特に興味を惹いた遺品なり、その後更に將來品の或者の調査等に就いてアンドリウス (F. H. Andrews) 氏や、ジャイルス博士 (Dr. Lionel Giles) を煩した事が多く、それから自然印度滞在中のスタイン卿とも間接な交渉を持つたわけであつた。これが一九三〇年の春氏の來朝に當つて大學から接待の役を仰付られた所以なのである（攻略）（梅原1947年）」。

上記「西域探検の學者達(1) — スタイン卿のことども —」は、数少ない関係者の公言として、「スタイン滞在日記」の行間を補填可能とするところがある。これによると、京都帝国大学の「学寶」として迎えられたスタインについて梅原は、「案内の役目を帯びて終始行を共にし、仔細にこの大探検家の日常に接する幸いにめぐまれた」と自らの充足感を吐露し、接遇の労をとった。「スタイン滞日日記」記載内容と符合する案内先等の記載には、スタインの姿を髣髴させるところがある。たとえば、4月16日（水）の大学における歓迎会（＝スタインが Dinner under Dr. Shinzo と記す箇所）を梅原は次のように伝えている：

「大學の本部の構上で催された新城總長主催の歓迎午餐會は、我が文學部の其道の學者達を網羅した盛宴で、總長の歓迎の辭に對してスタイン卿が立つて答へられ、京都學派の東洋學への大きい寄與に賛辭を呈され、それからいろいろ學問上の歡談がつゞいたのであつた。同卿はその夕私に向つてこの日が日本滞在中の最も記念すべき日となるであらうと云ふ言葉を似てそのよろこびを漏されてゐた（同前54頁）」。また、遺跡出土の錦復元に関連して、「漢代錦の再製が龍村氏の手で立派に出來上つた。この作品が京都帝國大學に於けるスタイン卿歓迎會の席上、先生から示されて、いたく主客の興味を惹いたことを目のあたり見るのよろこびともなつた（同前51～52頁）」という。

このくだりからは「敦煌學派」たちのなみなならぬ氣概さえも伝わると同時に、研究者としての親交互助精神からスタインをかくも厚遇したさまが窺い知れる。なお、梅原が言及する「漢代錦の再製が龍村氏の手で立派に出來上つた」とは、かつてスタインが樓蘭で見出した「漢錦韓仁繡文」（原品はニューデリー国立博物館蔵）が、染色美術家の初代龍村平蔵（1876～1962年）によって復元されたことの意である。

## 参考文献

- 阿部芳郎, 『失われた史前学 — 公爵大山柏と日本考古学 —』, 岩波書店, 2004年3月12日。
- 宇野哲人他, 「先學を語る — 狩野直喜博士 —」, 『東方學』第42輯, 東方學會, 1971年8月。
- 梅原末治, 「西域探検の學者達(1) — スタイン卿のことども —」, 『知慧』第2巻第4号, 47~55頁, 1947年。
- 大津忠彦, 「スタイン来朝とセイス — Bodleian Library (Oxford) 所蔵資料にみる学史上の意義 —」, 『日本オリエント学会第43回大会研究発表要旨集』, 日本オリエント学会第43回大会実行委員会, 2001年, 22頁。
- 大津忠彦, 「探検家スタインの日本滞在 — スタインが残した日記から — (1) 憧憬の日本, そして正倉院」, 『文化遺産の世界』第9号, 国際航業, 2003年5月26日, 20-21頁。
- 大津忠彦, 「探検家スタインの日本滞在 — スタインが残した日記から — (2) 古都にたどるシルクロード文化」, 『文化遺産の世界』第10号, 国際航業, 2003年8月25日, 26頁。
- 大津忠彦, 「探検家スタインの日本滞在 — スタインが残した日記から — (3) スタインが得た知遇のひとこま」, 『文化遺産の世界』第11号, 国際航業, 2003年11月25日, 22頁。
- 大津忠彦, 「探検家スタインの日本滞在 — スタインが残した日記から — (4) 中央アジア探検の頓挫と新境地イラン」, 『文化遺産の世界』第12号, 国際航業, 2004年2月25日, 25頁。
- 大津忠彦, 「セイス来朝と濱田耕作 — 日本における中近東考古学研究の系譜 —」, 『山下秀樹氏追悼考古論集』, 山下秀樹氏追悼論文集刊行会, 2004年6月2日, 253-262頁。
- 大津忠彦, 「A.スタインの日本滞在 — 滞日を支えた斯界の雄たちについて —」, 『日本オリエント学会第46回大会(50周年記念大会)プログラム・要旨集』, 日本オリエント学会, 2004年10月24日, 55頁。
- 大山柏, 『金星の追憶 — 回顧八十年 —』, 鳳書房, 1989年8月15日。
- 神田喜一郎, 『敦煌学五十年』, 筑摩書房, 1970年7月30日。
- 芹川博通, 『矢吹慶輝』(シリーズ 福祉に生きる6), 大空社, 1998年12月25日。
- 瀧精一, 「スタイン氏の齋らし歸れる燉煌千佛洞出の古畫に就て」, 『国華』第32編第9冊, 303-306頁, 1922年3月。
- フランク・ベルナル, 弥永昌吉, 「日仏会館の歴史, 目的および活動」, 『日仏文化』No. 31, 日仏会館, 1974年7月30日, 127-224頁。
- 矢吹輝夫, 『宗教学概論』, 文化書院, 1985年10月12日。
- Frank, B., Iyanaga, S., “La Maison franco japonaise, son histoire, ses buts, son fonctionnement”, 『日仏文化』No. 31, 日仏会館, 1974年7月30日, 1-126頁。
- Sayce, A. H., *Reminiscences*, Macmillan and Co., Ltd., London, 1923.

[この試論は筆者の研究課題のひとつ「日本における西アジア考古学研究の系譜」の一部である。資料「Ms. Stein 250」ならびに「Correspondence of A. H. SAYCE, VII, MS. Eng. letters, d. 68, 199-201」のBodleian Libraryにおける集成にあたり筆者は、とりわけDr. Stephanie Dalley (Oriental Institute, Oxford University) の協力を得ることができたことをここに記し、あらためて感謝の意を表したい。なお、上記資料の研究公表について、筆者はBodleian Libraryの許可を得ており、参考文献欄に明示した通りこれまですでに発表したところがある。]

(おおつ ただひこ, 筑紫女学園大学文学部アジア文化学科教授 ohtsu@chikushi.u.ac.jp)